

看護学教育カリキュラムにおける基礎教育科目の検討2

—本学看護学部学生調査結果からの考察—

石光美美子 上田昇 マービンスミス 神原裕子 佐藤亜月子 堤千鶴子

(Fumiko ISHIMITSU Noboru UEDA Marvin SMITH
Yuko KANBARA Atsuko SATO Chizuko TSUTSUMI)

【要約】

社会では大学全入時代が到来し、学士課程で学生が身につけるべき学習成果を明確にしていくことが求められている。看護系大学においても平成21年「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告」では、大学における看護系人材養成の基本方針として「教養教育を充実する」ことが教育内容の見直しの一つとして挙げられた。そこで本研究は看護学部の学生（1年生から4年生）を対象に、基礎教育科目の選択動機や科目へのニーズについて調査を行い、学生が主体的に学び、専門領域の学習に発展させられるような教育方法を検討することを目的とした。その結果、1. 基礎教育科目の看護カリキュラム上の位置づけと関連の明確化、2. これらを可視化するための媒体としてシラバスの内容やその活用方法の検討、3. 学生がどの学年においても自主的に基礎教育科目を履修できるシステムの検討、が教養教育の充実に向けての課題であると考えられた。

キーワード：看護基礎カリキュラム、教養教育、一般教養科目、履修動機

I. はじめに

大学・短期大学への志願者総数に対する入学者総数の割合は90%以上を超え、社会ではいわゆる大学全入時代が到来したと言われている。こうした中で、大学教育全体の大きな課題として、学士課程で学生が身につけるべき学習成果を明確にしていくことが求められている。平成20年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」¹⁾では、各専攻分野を通じて培う学士力として、「1. 知識・理解（多文化・異文化、人類の文化、社会と自然に関する知識の理解）」「2. 汎用的技能（コミュニケーション・スキル、論理的思考力、問題解決力、等）」「3. 態度・志向性（自己管理力、倫理観、生涯学習力、等）」「4. 統合的な学習経験と創造的思考力」が学習成果に関する参考指針として示された。看護系大学においても、このような指針が作

成されていることの背景も踏まえ、学生の実態に即した学習成果の具体的な達成水準等を主体的に考えていくことが求められている。平成21年「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告」では²⁾、今後の大学における看護系人材養成の基本方針として、「看護系人材は人の支援に関わる専門職であることから教養教育を充実する」ことが教育内容の見直しの方向性の一つとして挙げられた。これはすなわち、学士課程では看護を取り巻く幅広い知識体系を学び、社会や環境との関係において自己を理解するための素養や、創造的思考力を育成するための教養教育を前提に、健康保持増進・疾病予防を含めた看護師等の基礎となる教育を充実していく必要があることを示している。

目白大学看護学部のカリキュラムでは、教養科目で

いしみつふみこ：看護学部看護学科
うえだのぼる：看護学部看護学科
マービンスミス：看護学部看護学科
かんばらゆうこ：看護学部看護学科
さとうあつこ：看護学部看護学科
つつみちづこ：看護学部看護学科

ある基礎教育科目（以下、基礎教育科目とする）が43科目開講され、「人間理解を深め、人間の文化と生活を豊かにするための教養科目や国際社会に対応できるための基礎となる科目を学習する」ことにその目的を置いている。この目的に沿って学習することで、幅広い豊かな人間性を育み、専門領域の学習への発展も期待できる。しかし、現状は必修科目以外の基礎教育科目を履修する学生が極端に少なく、基礎教育科目を学ぶ目的が学生に十分理解されていない可能性がある。また、教員がそのねらいを十分伝えきれていない可能性がある。

他大学においても基礎教育科目の履修に関して、いくつか課題が報告されている。守田³⁾は一般教養科目である「化学」は、看護の専門科目と深く関連した科目であるものの、看護系大学のほとんどで選択科目であり、「化学」の必修化あるいは履修指導科目であることが、今後の看護基礎教育において重要な課題であることを指摘している。また、鈴木⁴⁾は一般教養科目の拡充が必要な理由を、1. 専門基礎科目の受講に必要な共通語たる概念の提供、2. 物質や生物および自然現象に対する一般的な理解力の底上げ、3. 学生達の講義へのモチベーション維持であると提言している。一方、野坂ら⁵⁾は看護系大学において、一般教養科目が看護学教育および看護実践教育とどのように関連させつつ行われているか、その実践報告の中で一般教養科目を担当する教員と看護系の専門科目を担当する教員が相互に理解し、教育目標に向けた協力は欠かせないことを強調している。このように基礎教育科目は、看護学のような実学とは性格を異にしており、さらに直接的なつながりが少ないことから、学生が基礎教育科目の重要性を理解し履修できるような工夫が「教養教育の充実」の鍵になると考えられる。

そこで、学生が基礎教育科目を学習する意味を自ら自覚して学び、専門領域の学習に発展させられるような教育方法を検討することが必要であると考えた。例えば、カリキュラム上の各科目の位置づけと関連を可視化し、学生の理解を促進するような媒体を作成する方法などが挙げられる。このような教育方法が明確になれば、入学当初に抱く「看護師になりたい」といったモチベーションを維持し、高めつつ、学生が主体的、創造的に学習する方法を身につけることが基礎教育科目で可能になると考えられる。したがって、本研究は今後、カリキュラムへの検討も視野に入れた教育方法

を検討するために、看護学部には所属する学生の基礎教育科目の選択動機や科目へのニーズ、看護師を目指すものとしてのモチベーションについて実態を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1) 対象

目白大学看護学部（2009年度）に在籍する1年生から4年生までの学生369名であった（1年生105名、2年生100名、3年生76名、4年生88名）。

2) 調査時期

2009年11月下旬から12月上旬。

3) 調査内容

本研究目的に類する先行研究が少なく、参考となる調査内容がなかったため、本研究に携わる教員全員で、看護学生が基礎教育科目を選択する動機やニーズに関する質問10項目、基礎学力に関する学生の考えについての質問3問、看護師を目指すモチベーションに関する質問5項目、計18項目を独自に作成した。またこれらの項目を4段階の間隔尺度で質問した。

4) 調査方法

調査票の配布は、一斉授業あるいはクラス別授業、グループ別学習時に、研究に携わる教員が調査の目的、方法および倫理的配慮について、趣意書を用いて口頭で説明し実施した。また調査票の回収は、回収箱への投函あるいは教員の指定した場所への提出によって回収した。

5) 倫理的配慮

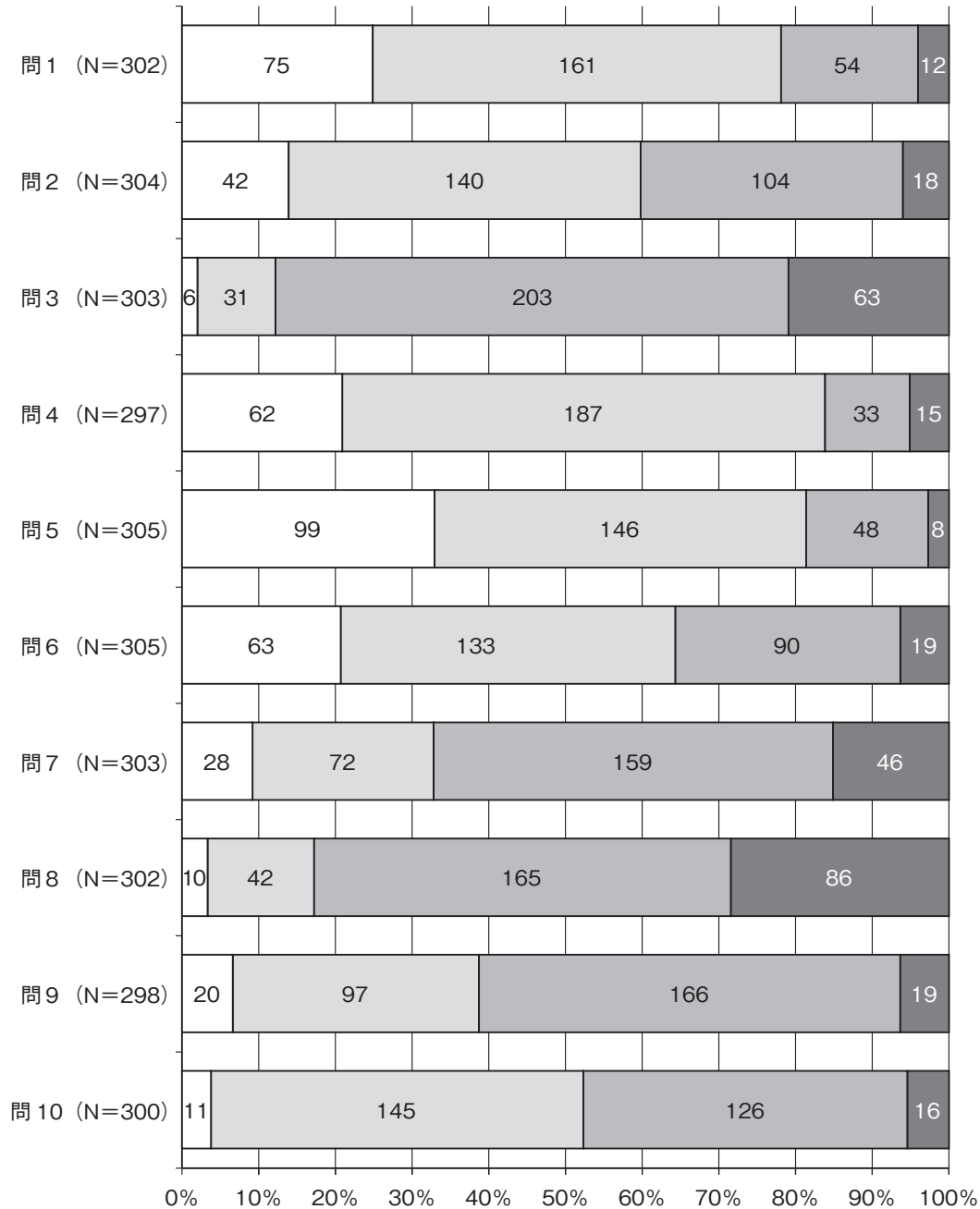
倫理的配慮については、研究参加は自由であること、調査協力しない場合や参加を途中で辞退した場合においても不利益を被らないこと、無記名調査であること、調査前に口頭で説明し、調査票の提出をもって同意ありとみなした。

6) 分析方法

18項目毎に4学年全体と学年別の記述統計を算出し、回答の傾向について比較分析した。

表 1. 看護学生の基礎教育科目の選択動機やニーズ

注) 図中の数値は実数を示す

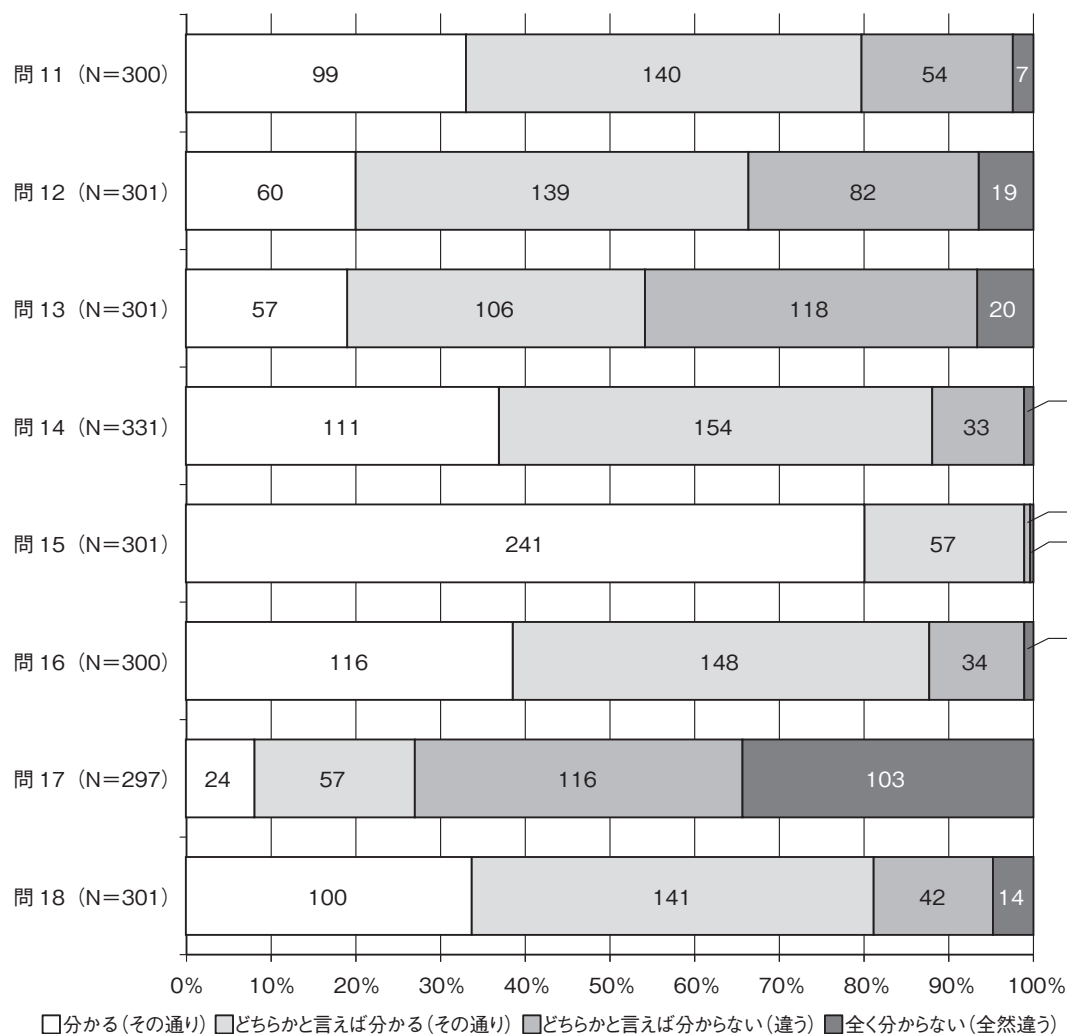


□分かる (その通り) □どちらかと言えば分かる (その通り) ■どちらかと言えば分からない (違う) ■全く分からない (全然違う)

- 問 1. 基礎教育科目と専門教育科目の区別が分かる
- 問 2. 基礎教育科目のうち専門（看護）科目と関連の強い科目とそうでない科目があるが、後者の外国語や一般教養的な科目が何のためにあるか分からない
- 問 3. 選択科目の外国語や一般教養的な科目は履修したいが、時間割や実習の都合で履修できないことがある
- 問 4. 選択科目の外国語や一般教養的な科目はシラバスを読み履修している
- 問 5. シラバスは履修する科目を決める上で重要である
- 問 6. 選択科目の外国語や一般教養的な科目には関心がない
- 問 7. 選択科目の外国語や一般教養的な科目を増やして欲しい
- 問 8. 大学では専門的な知識と技術だけ学べばよいと考える
- 問 9. 目白大学のカリキュラムは専門科目に偏っていると思う
- 問 10. 目白大学のカリキュラムは専門と基礎のバランスが取れていると思う

表2. 看護学生の基礎学力に関する考えと看護師を目指すモチベーション

注) 図中の数値は実数を示す



- 問 11. 自身の基礎学力（日本語の読み書きや思考力）が足りないと感じる時がある
 問 12. 基礎学力をつけるための授業科目が欲しい
 問 13. 高校の復習のような勉強はしたくない
 問 14. 理想（目標）とする看護師像を持っている
 問 15. 広い視野で物事を見られるようになりたい
 問 16. 将来、自分の仕事に誇りが持てそうに思う
 問 17. 海外で働きたい
 問 18. 大学での生活は自分の人生の中で楽しい時間だったと言えそうだ

Ⅲ. 結果

対象者369名に調査票を配布し、1年生74名、2年生83名、3年生69名、4年生76名から回答が得られ、総数305名であった（回収率および有効回答率ともに82.6%）。

基礎教育科目の選択動機に関する項目から結果を述べる。表1のとおり、問1「基礎教育科目と専門教育科目の区別」は学生全体で「分かる」75名（24.6%）、「どちらかと言えば分かる」161名（52.8%）であり、約8割の学生が「分かる」と回答した。問2「基礎教

育科目のうち専門（看護）科目と関連の強い科目とそうでない科目があるが、後者の外国語や一般教養的な科目が何のためにあるか」については、全体で「分かる」42名（13.8%）、「どちらかと言えば分かる」140名（45.9%）であり、半数以上の学生が「分かる」と回答した。一方で、問3「選択科目の外国語や一般教養的な科目は履修したいが、時間割や実習の都合で履修できないことがある」では、学生全体で「どちらかと言えば違う」203名（66.6%）、「全然違う」63名（20.7%）であった。問4「選択科目の外国語や一般教養的

な科目はシラバスを読み履修している」については、学生全体で「その通り」62名（20.3%）、「どちらかと言えばその通り」187名（61.3%）であり、8割以上の学生がシラバスを読んだ上で履修していた。また問5「シラバスは履修する科目を決める上で重要である」項目では、学生全体で「その通り」99名（32.5%）、「どちらかと言えばその通り」146名（47.9%）であり、シラバスが科目履修に際し活用されている実態が明らかになった。さらに問6「選択科目の外国語や一般教養的な科目には関心がない」という項目について、学生全体で「その通り」63名（20.7%）、「どちらかと言えばその通り」133名（43.6%）であり、6割の学生が「関心はない」と回答した。また問7「選択科目の外国語や一般教養的な科目を増やして欲しいか」については、学生全体で「その通り」28名（9.2%）、「どちらかと言えばその通り」72名（23.6%）であった。問8「大学では専門的な知識と技術だけ学べば良いと考える」項目では、学生全体で「どちらかと言えば違う」165名（54.1%）、「全然違う」86名（28.2%）であった。次にカリキュラムに関する質問では、問9「目白大学のカリキュラムは専門科目に偏っていると思う」が、学生全体で「どちらかと言えば違う」166名（54.4%）、「全然違う」19名（6.2%）であった。さらに問10「目白大学のカリキュラムは専門と基礎のバランスが取れていると思う」が、学生全体で「その通り」11名（3.6%）、「どちらかと言えばその通り」145名（47.5%）であった。

さらに基礎学力に関する学生の考えについて表2に結果を示す。問11「自身の基礎学力（日本語の読み書きや思考力）が足りないと感じる時がある」項目では、学生全体で「その通り」99名（32.5%）、「どちらかと言えばその通り」140名（45.9%）であり、学生の半数以上が「足りない」と感じる経験をしていた。また問12「基礎学力をつけるための授業科目が欲しい」項目では、学生全体で「その通り」60名（19.7%）、「どちらかと言えばその通り」139名（45.6%）であり、学生の半数以上が基礎学力をつけるための授業を望んでいた。さらにその学習方法については、問13「高校の復習のような勉強はしたくない」項目で、学生全体で「その通り」57名（18.7%）、「どちらかと言えばその通り」106名（34.8%）であった。

履修科目の選択やその考え方に影響すると考えられた看護師を目指すモチベーションに関しては、問14

「理想（目標）とする看護師像を持っている」に対し、学生全体で「その通り」111名（36.4%）、「どちらかと言えばその通り」154名（50.5%）であり、8割以上の学生が目標とする看護師像を持っていた。また問15「広い視野で物事を見られるようになりたい」という項目では、学生全体で「その通り」241名（79.0%）、「どちらかと言えばその通り」57名（18.7%）であった。問16「将来、自分の仕事に誇りが持てそうに思う」項目では、学生全体で「その通り」116名（38.0%）、「どちらかと言えばその通り」148名（48.5%）であった。また問17「海外で働きたい」では、学生全体で「どちらかと言えば違う」116名（38.0%）、「全然違う」103名（33.8%）であった。さらに問18「大学での生活は自分の人生の中で楽しい時間だったと言えるのだ」の項目で、学生全体で「その通り」100名（32.8%）、「どちらかと言えばその通り」141名（46.2%）であった。

Ⅳ. 考察

看護系の学士課程教育において看護実践力の育成に直結する専門科目と同様に、一般教養科目も重要であることは認識されている。しかし一般教養科目と専門科目の関連に注目したカリキュラム研究が少ない現状において、カリキュラムへの検討も視野に入れた教育方法を検討するためには、学生の基礎教育科目の選択動機や科目へのニーズ、看護師を目指すものとしてのモチベーションについて実態を明らかにすることが重要であると考えた。

本調査結果から明らかになったことは、看護学部の学生全体の約8割が、基礎教育科目と専門教育科目の区別は「（どちらかと言えば）分かる」と回答しており、基礎教育科目のうち外国語や一般教養的な科目が何のためにあるのか「（どちらかと言えば）分かる」と回答した学生も約6割にとどまっていた。当初、これらの選択科目の履修は時間割や実習の都合に影響されている可能性があるとして推測していたが、学生全体では「（どちらかと言えば）違う」と回答した割合は8割以上であり、時間割や実習の都合によって履修できない状況ではないことがわかった。さらに、「大学では専門的な知識を技術だけ学べばよい」と考える学生は全体で1割であったものの、「選択科目や一般教養的な科目への関心」や「それらの科目の増加」を望んでいる学生は教員が予想していた以上に少なかった。すなわ

ちこの結果は、学士課程教育の主要な特徴の一つである教養教育を履修する目的を学生が十分に理解できていない結果であると考ええる。事実、先行研究においても看護基礎教育における教養教育の位置づけを模索している現状が報告されていることから³⁾⁵⁾、一般教養科目を履修する意味を学生に十分に伝えきれていない可能性がある。さらに「選択科目や一般教養的な科目への関心」は高学年になるほど「関心がない」と回答した学生は増加したが、「選択科目や一般教養的な科目の増加」を希望している学生は高学年ほど多かった。また基礎学力に関する学生の考えは、「基礎学力が足りないと感じる時がある」と回答した学生が、全体の約8割おり、「このための授業科目が欲しい」と回答した学生は全体の6割であった。特に基礎学力の不足を感じている学生の数は高学年につれて増加しており、教養科目は専門基礎科目の受講に必要な共通語たる概念を提供するもの⁴⁾であることから、専門教育科目を学ぶ過程で、基礎学力の不足を感じていた学生が多かった可能性がある。これらの結果に類する報告⁶⁾では、学年が上昇するにつれて学生は倫理の勉学の必要性を認めている。本学においても4年間の看護基礎教育カリキュラムでは、選択科目や一般教養的な科目は1年生から2年生中心に配置されており、学生の内発的動機付けに直接影響する専門看護学実習は主として3、4年時に配置されていることから、専門看護学実習を経験した学生がその後に教養科目を学ぶ意味を理解し、履修を希望している結果であると解釈できる。さらに、看護師を目指すモチベーションに関しては、学生全体の8割以上が「理想とする看護師像」を持っており、「広い視野で物事を見られるようになりたい」と回答していることから、看護師になりたいというモチベーションは維持できていることが明らかとなった。

以上、本結果から学生が主体的に学び、専門領域の学習に発展させられるような教育方法としては、カリキュラム上の各科目の位置づけと関連を明確にすること、また可視化するための媒体としては、「選択科目や基礎教育科目の履修を決定する上でシラバスを読む、重要である」と回答した学生が全体の8割以上であったことから、シラバスの内容やその活用方法を検討することが重要であろう。特に選択科目である外国語や一般教養的な科目を、学生が自主的にどの学年においても履修できるようなシステムを検討することも必

要であると考ええる。一般教養科目の充実や専門科目との関連を考慮した看護学教育カリキュラムについて検討した柴田ら⁷⁾の報告においても、「看護基礎教育における教養教育の役割とその位置づけ」、「教養教育充実にむけての戦略」が各大学の取り組む内容として挙げられている。今後は本学が養成したい看護系の人材を育成するために、本結果から明らかになった学生の状況を踏まえて教養教育を充実させるための取り組みについて検討することが課題であると考ええる。

V. 結語

本研究は、看護学部 に所属する学生（1年生から4年生）の基礎教育科目の選択動機や科目へのニーズ、看護師を目指すものとしてのモチベーションの実態を明らかにすることを目的に調査した結果、以下の結論を得た。

1) 基礎教育科目と専門教育科目が異なること、またそれを学ぶ目的を認識しているのは、学生全体の約6割にとどまっていた。

2) 大学では専門的な知識や技術だけ学ばよいと考える学生は全体の1割であったものの、選択科目や一般教養的な科目に関心のある学生は全体に4割であり、それらの科目の増加を望んでいる学生は全体の3割であった。

3) 選択科目や基礎教育科目の履修を決定する上でシラバスを読む、重要であると回答した学生は、全体の8割以上であった。

4) 基礎学力については、学生全体の8割以上が足りないと感じる時があると回答し、このための授業科目が欲しいと回答した学生は全体の6割であった。

5) 学生は全体の8割以上が、「理想とする看護師像を持って」おり、「広い視野で物事を見られるようになりたい」と回答しており、看護師になることへのモチベーションを維持できていた。

謝辞

本調査にご協力下さいました看護学部学生の皆さまに、心から御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 中央教育審議会：「学士課程教育の構築に向けて」（答申）。（2008）

- 2) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告 (2009)
- 3) 守田良毅：日赤九州国際看護大学における一般教養科目「化学」の履修状況および他看護系大学における開講現況と看護基礎教育における課題について. 日本赤十字九州国際看護大学IRR 6, 23-32 (2008)
- 4) 鈴木真也：大分県立看護科学大学における基礎科学教育の現状と課題. 大分看護科学研究 3 (1), 15-18 (2001)
- 5) 野坂俊弥, 江藤裕之, 志村ゆず：看護学とその隣接領域のコラボレーションを目指して 長野県看護大学における一般教養教育の実践報告. Quality Nursing 10 (10), 959-973 (2004)
- 6) 柳井晴夫, 石井秀宗：看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究. 11 (1), 1-9 (2007)
- 7) 柴田弘子, 赤井由紀子, 池田京子他：一般教養科目の充実や専門科目との関連を考慮した看護学教育カリキュラムの展開. 日本看護学教育学会第20回学術集会講演集, 153 (2010)